

「戦争」を記録する：王朝時代ビルマの歴史記述 ～アイェードーボン・チャン *Ayedawbon Kyan* の紹介を中心として～

渡邊 佳成

はじめに

前近代の東南アジアにおける歴史書としては、「年代記、王朝年代記」もしくは「王統譜、王統史」と訳される、王の事績を中心として描かれる「歴史の語り」が多くの地域に存在する。

島嶼部東南アジアでは、1365年に成立した古ジャワ語の韻文作品『デーシャワルナナ *Desawarnana* (地方の描写)』が、マジヤパヒト王国の宮廷の出来事を中心として当時の王国の状況を描いている(青山 1991)し、18～19世紀ジャワのマタラム王国の宮廷で詠まれた『ババッド・タナ・ジャウイ *Babad Tanah Jawi* (ジャワ国縁起)』は、預言者アダムから神話の神々・諸王を経て、パジャジャラン、マジヤパヒト、マタラムへと続くジャワの諸王の系譜を語り、マタラム王家とそれぞれの王の支配の正統性を述べることを主たる目的としている(柴田 1991; 深見 2011; 2012)。

マラッカ海峡周辺を中心とするマレー世界でも、「話」を意味するアラビア語に由来するヒカヤット *hikayat* が多く生まれ、マレー系諸王国の英雄たちの物語りや王国の年代記などの史伝が作られている。その代表的なものとしては、王国を主題とする『パサイ王国物語 *Hikayat Raja Pasai*』(14世紀末もしくは15世紀の編纂)、『マレー編年史 *Sejarah Melayu*』(17世紀初)、個人をテーマとした『ハン・トゥア伝 *Hikayat Hang Tuah*』(18世紀初?) などがある(柴田 1991; 野村 2001)。

漢字文化圏に属するベトナム北部・中部をのぞく、上座部仏教圏の大陸部東南アジアでは、スリランカのパーリ語史書『マハーヴァンサ *Mahāvamsa* (大史)』(5世紀)に範をとった様々な歴史書が編纂された。

これらのうち、15-16世紀頃にはそれぞれの民族語で記されるようになる、ヤーザウイン *yazawin* (ビルマ)、ポンサーワダーン *phongsawadan* (タイ、ラオス)、バンサーバダー *bansavatar* (カンボジア: 19世紀以降) などの王統史、年代記は、王の事績の記述を中心として、王権の正統性を主張するとともに、王族の子弟たちにとっては訓戒の書としても使われたと言われている(弘末・渡辺 2008; Tet Htoot 1961; 大野 1987; 石井 1984; 北川 2003)。これらの王統史、年代記とは別の歴史記述の伝統として、個別の寺院、仏塔の縁起を記したタマイン *thamaing* (ビルマ)、タムナーン *tamnan* (タイ) などが、後には、その地方の仏教史、地方史を記した歴史書として編纂されていくようにもなる(奥平 1999; 石井 1984)¹。

¹ もちろん、ヤーザウインとポンサーワダーン、タマインとタムナーンが、それぞれ全く同じジャンルの歴史書というわけではない。ともに王統史、年代記という広い枠組みの中に入る史書ではあるが、その記述する歴史は、ヤーザウインの多くが神話時代から以前の王朝を経て現在の王朝の歴史を語るのに対して、ポンサーワダーンの多くは、個別の王朝の断代史となっている点で異なるし、タマインは各地の仏塔の縁起を記述の中心に置いている。

すなわち、少なくとも、タイ、ビルマにおいては、戦争や寺院の建立など同じ事績を述べたものであっても、一方は、王権の正統性を主張するなど力点は王権の側に置かれ、もう一方は、主たるモチーフは仏教にあり仏教史を述べることに主眼が置かれていて、二つの異なった歴史叙述の伝統があったことがわかる（石井 1984: 22）。

これら二種類の歴史叙述の伝統のほか、前近代のビルマには、特定の王の名前もしくは地域の名前を前に冠するアイエードーボン *ayedawbon* と称する歴史書が存在する²。アイエードーボンは、日本では「戦記」「～王一代記」などと訳され（ペーマウンティン 1992: 140-141, 225-227）、ビルマ語の辞書には「国王の武勲記、戦記、遠征記」（大野 2000: 855）とされていることからわかるように、戦争の記述を中心として国王の事績を語るものとして理解されている。しかし、国王の名前を冠するアイエードーボンは、必ずしも戦争のみを記述しているわけでもなく、ヤーザウィンとどのような違いがあるのか、また、地域の名称を冠するアイエードーボンは、どのような意図のもとに書かれたものであるのか、不明な点も多い。

本稿では、ウー・トーカウン氏による最近の研究（Thaw Kaung 2010a, 2010b）に拠りつつ、アイエードーボンがどのような歴史書であるのか、考えてみたい。

1. アイエードーボンの語義と特徴

現在、知られているアイエードーボンは、以下の7種9本である。

- (a) *Dhanyawaddy Ayedawbon*
- (b) *Rajadirit Ayedawbon*
- (c) *Hanthawaddy Hsinbyumyashin Ayedawbon*
- (d) *Nyaungyan Mintaya Ayedawbon*
- (e) *Alaung Mintaya Gyi Ayedawbon* (3種のテキスト)
- (f) *Majjhimadesa Ayedawbon*
- (g) *Hsinbyushin Ayedawbon*

それぞれの記載内容の詳細は後述するが、これらのうち、(a)と(f)が地名を冠するアイエードーボン、その他が王名を冠するアイエードーボンである。各王の在位年代は以下のとおりである。

(b) ラザディリッ *Rajadirit* もしくはラザダリッ *Razadarit* 王：AD 1385-1423

(c) ハンターワーディー白象主 *Hanthawaddy (Hamsavati) Hsinbyumya Shin* すなわちパインナウン王：AD 1551-1581

(d) ニャウンヤン正法王 *Nyaungyan Mintaya*：AD 1599-1605

(e) アラウン大正法王 *Alaungmintaya Gyi* すなわちアラウンパヤー王：AD 1752-1760

² エーチャー *Aye Kyaw* 氏は、タイにも同様に、戦争など特定の出来事の記録である *chotmai het*（もしくは *kotmai het*）があるとするが、アイエードーボンのような単行の書なのか、文書記録なのか不明である。後考を俟ちたい（*Aye Kyaw* 1985: 247）。

(g) 白象主 Hsinbyushin、すなわち、ボードーパヤー王：AD 1782-1819

また、(a)～(e)は『アイェードーボン5巻本』として1923年に刊行され、後に(e)の異本を加えて『ミャンマー王たちのアイェードーボン(アイェードーボン6巻本)』として何度か再刊されている(Saya Bi et al 1923; -- 1970; -- 2005)。(f)は、ロンドンの大英図書館旧インド省コレクションの中から「発見」され、後に発見された他の写本との校勘の上、1998年に刊行されており(Hla Tun Phyu 1998)、(g)のみ未刊行の状態にある。

アイェードーボン³の語義には、様々な意味が含まれている(Thaw Kaung 2010a: 14-17; 荻原 1971: 125)が、教育省のビルマ語委員会が編纂した *Myanmar-English Dictionary* は、“[archaic] historical account of a royal campaign”と定義し(Myanmar Language Commission 1993: 587)、19世紀初頭の語義を伝える *The Judson Burmese-English Dictionary* は、“ayedaw を” A royal affair; a term applied to wars waged by the king, rebellions, etc.”と定義しており(Judson 1921: 100)、戦争を中心とする王の事績についての記述であるというのが、最大公約数的語義であることがわかる。

ウー・トーカウン氏によれば(Thaw Kaung 2010a: 17-18)、アイェードーボン・チャン(書)の全体的な特徴として以下の四点を挙げることができる。

- (1) 武勇の誉れ高い人物がどのようにして王位を獲得したのか、特に、権力を獲得し王座に就いたのかの記述
- (2) その王がどのような手段、努力によって権力を維持したのかについての記述
- (3) 王の権力、王位に対してどのような謀反、叛乱が起こったのか、そして、それが功裏に鎮圧されたのかについての記述
- (4) その勢力を拡大するためにどのような戦争が行われたのかについての記述

以下、現存する個々のアイェードーボンの記述内容を具体的に検討することによって、アイェードーボンを「戦記」としてとらえることの当否を検討していくことにしたい。

2. アイェードーボンの記述内容とその性格

各アイェードーボンの編著者や成書年代については諸説あり、また、異本同士の厳密な比較校訂がなされておらず、どれがオリジナルのテキストで、どれが後世の追補・修正部分なのか判然としないものも多いが、ここでは、通説に従って、その成書順にアイェードーボンの内容を検討していきたい。なお、先に述べた5巻本、6巻本は、アイェードーボンを(a)～(e)の順にテキストを掲載しているが、成書順でもないし、テキストの述べる時代順でもなく、その根拠は不明である。

³ アイェードーボン ayedawbon を分解すると、「aye」= ことがら、仕事、用事、用務、職務、営為、行動、行事、「daw [taw]」= ブッダ、国王などに関する単語(名詞、動詞など品詞を問わず)につけられる敬辞、「bon [pon]」= 図、話、物語)の三語からなる。

(b) *Rajadirit Ayedawbon*

ラーザディリッ・アイェドーボンの編者については、研究者の見解はほぼ一致している。バインナウン王（在位 1551-1581）に仕えたモン族の宰相で將軍であったビンニャダラ *Banya Dala* (c.1518-1572) が、その当時存在していたモン語の幾種かの史書をもとに編纂し、それをビルマ語に翻訳したものである。ただし、正確な成書年代やそれが依拠したもとのモン語の史書の詳細は不明である⁴。

大英図書館の旧インド省コレクションに *Magadu Ayedawbon* と書名が附された貝葉文書 (Burmese manuscript no.3449) があるが、これは、後にワーレルー *Wareru* (在位 1287-1296) と名乗ってマルタバンの領主になるマゴドゥ *Magadu* の事績を扱っているが、単行の別のアイェドーボンではなく、ラーザディリッ・アイェドーボンの第一部にあたることが判明している (Thaw Kaung 2010a: 26)。また、5 巻本、6 巻本に収録されているラーザディリッ・アイェドーボンのビルマ語テキストとは別に、モン語版のテキスト (Nai Pan Hla 1958) より新たにビルマ語訳したのも出版されている (Nai Pan Hla 1977)。

先述したように、ラーザディリッ・アイェドーボンは、ラーザディリッ王（在位 1385-1423）の事績のみならず、ハンターワーディー・モン王国の始祖ワーレルーからラーザディリッまでの諸王の事績をも含んでいて、1423 年のラーザディリッ王の死去までの 165 年間の王国の歴史を綴っている。したがって、この書を王の「一代記」と訳すとその内容を性格に反映していないことになる。

また、その記事を見ると、上ビルマ、インワ王国のミンカウン王との戦闘の記述が多いというものの、様々な宮廷内の陰謀、謀反、インワ王国との外交などモン諸王の事績を綴っており、「戦記」というよりは、王国の年代記といってもよいような内容を多く含んでいる。ただ、やはり、幼少時代も含めて、ラーザディリッ王に関わる記述が全体の三分の二近くを占めており、賢明かつ勇猛で、女性や配下にも優しい偉大な正法王として描かれていることも事実であるので、このアイェドーボンは、「ラーザディリッ王などハンターワーディー・モン王国の諸王の年代記」と見るのが妥当であると思われる。それは、本書を編纂しビルマ語に翻訳した際にはじめて「アイェドーボン」というタイトルがつけられたというナイパンフラ氏の見解⁵とも一致する。

ただ、モン族の王国を打ち倒して建国された第一次タウンギー朝の最盛期の王の治世の時期に、何故、「モン王国の諸王の年代記」が編纂されたのかという疑問は残る。また、注 4 で紹介したナイパンフラ氏の見解が正しいとすれば、この「諸王の年代記」に何故「アイェドーボン」というタイトルがつけられたのかということも、不明である。

⁴ モンの研究者ナイパンフラ *Nai Pan Hla* 氏は、新訳本の序文で、Thudhamawadi Thiha Rajadiraja Wuntha Kyan のタトゥン・ヤーザウインの部分をもとに、ビンニャダラが編纂しビルマ語に翻訳して、「ラーザディリッ・アイェドーボン」とタイトルをつけたと述べている (Nai Pan Hla 1977: 9)。

⁵ 注 4 参照。

ウー・ペーマウンティン氏は、「ビルマ人（族）に、民族意識の覚醒を促すため…ビルマ語に翻訳した」、「ビルマ人（族）たちはこれを読んで、タライン（モン）族と戦闘した際の、自分たちの欠点や弱点を具体的に知り、後にそれらを直すように努めた」と述べているが（ペーマウンティン 1992: 140-141）、その根拠は不明であるし、ビルマ族のタウングー朝がビルマ族の英雄ではなくモン族の英雄を取り上げる意図は不明である。本書が作成されたのは、ビルマ族のためというよりは、むしろ、モン族の不満を和らげるためと考えるほうがまだ説得力があるように思える。もしくは、ビルマ族対モン族の対抗という従来の民族史観から脱して、様々な民族を構成員とする下ビルマの地域国家として第一次タウングー朝をとらえる新しい視点に立てば、前身の王国の英雄たちの事績を取り上げることによって、後継者としての自らの地位を確立することがねらいだったと考えることもできる。

(c) *Hanthawaddy Hsinbyumyashin Ayedawbon*

書名のハンターワーディー *Hanthawaddy* は、下ビルマの中心的都市ペグー（パゴ）、シンビューミャーシン *Hsinbyumyashin* は、「白象たち *Hsinbyumya* の主 *shin*=国王」を意味し、ハンターワーディー・シンビューミャーシンは、第一次タウングー朝第三代の王バインナウン *Bayinnaung*（在位 1551-1581）の尊称である。

経典を中心とする文献の解題リスト、ピタカッ・タマイン *Pitakat-taw thamaing*⁶ は、書名のみで、著者の名前は不明としている（*Yan* 1959: 266）。また、写本、版本ともに、テキストには著者の名は記されていない。本書のテキストを最初に載せた 5 巻本は、著者を (c) *Alaung Mintaya Gyi Ayedawbon* の著者であるレッウエーノーヤター *Letwe Nawrahta*（1723-1791）とし、6 巻本第 3 版もそれに同意している。しかし、コンバウン朝史の研究で名高いイーイー博士は、使われている文体などを厳密に比較検討し、その著者はレッウエーノーヤターではなく、トゥインディンダイツ・ウン *Twin-thin Taik Wun* マハースィードウー *Maha Sithu* ウー・トゥンニョー *U Tun Nyo*（1726-1806）であるとしている（*Yi Yi* 1969: 50-51）。

これに対して、より完全なテキストを載せていると考えられる貝葉写本を発見したウー・トーカウン氏は、著者名は附されていないけれども、奥付に 1671 年という写本の作成年代が記されていることから、その著者は従来唱えられてきた、レッウエーノーヤターでも、トゥインディンダイツ・ウン・マハースィードウーでもないことが明らかになったと述べている（*Thaw Kaung* 2010a: 19-22; 2010b: 128-130）。

⁶ 著者マインカンカイン・ミョウザー、ウー・ヤン（1815-1891）はコンバウン朝後期の王ミンドン *Mindon*（在位 1853-1878）、ティーボー *Thibaw*（在位 1878-1885）両王の宮廷の文書担当官として仕え、当時の宮廷で使用されていた諸種の書物に精通していたといわれる。宮廷の「図書館」の蔵書リストと言っている *Pitakat-taw thamaing*（三蔵經典史）は、王朝滅亡後の 1888 年に完成し、そのほとんどは仏教の經典、注釈書の類であるが、後半部分には、綴字書、文法書、文学作品、史書などもリストアップされていて、その著者、簡単な内容の解題がついているものもある。

さらにその後発見された別の写本（1839年の書写日付）には、著者の名前や編纂の経緯も記されていた。それに拠ると、著者は、ダピンシュエティーTabinshwehti（在位 1531-1550）からバインナウン、息子のナンダバイン Nandabayin（在位 1581-1599）の三代の王に仕え、オウッタロー Oketharaw という称号を付与された高官ヤーザタマン Yazataman (Rajataman)で、1564年に、当時皇太子であったナンダバインや他の王子たちから、父王バインナウンの事績をまとめるよう命じられたようである。ただ、現存するテキストは、バインナウンの崩御の二年前の1579年の記事までを扱っているので、その成書年代は、それ以降ということになる。

幸い、トーフラ博士による諸写本の厳密な校勘を経たテキストが公刊されたので、今後、この写本の記述が信用できるのかの研究も進んでいくと思われるが、トーフラ博士による現時点で確認されている諸写本や他の史料の記述内容との比較研究によれば、本アイエードーボンは、コンバウン朝時代に作成された二次史料ではなく、同時代史料として貴重な記録ということになる (ibid; Toe Hla 2006: ko-su)。

本書の内容は、タイトルのとおり、バインナウン王の事績を綴っており、王の「一代記」と言ってもいいものとなっている。先の1839年写本の奥付には、王の治世中の二百三十五の出来事についての記録が集められ、そのうち百三十五件を著者が選択し、さらにその中の百の出来事は記録する価値のないものとして斥けられたと述べている (Thaw Kaung 2010a: 21-22)。

収録するにふさわしいとされたのは、成功裏に終わった軍事行動・戦争についての記事で、王の即位直前の1549年以降の事績がほぼ年代順に述べられている。すなわち、前王ダピンシュエティー暗殺の混乱を收拾して王位に即き、各地のビルマ、モンの領主を支配下に加えていき王国を再建していく戦い、東部のシャン族の諸侯を配下に収めていく戦い、さらに今日のミャンマーの領域のみならず、北タイのチェンマイ (1557-58, 1564, 1565)、ラオスのヴィエンチャン (1558, 1569-70, 1574)、北西のマニプール (1559) にまでその影響力を延ばし、1563年からタイのチャオプラヤー流域にも進出してアユタヤを落とし (1563-64, 1568, 1569-70, 1574)、王国の最盛期を現出していく戦いなどが採りあげられている。

以前の5巻本（6巻本第3版）では、1576年のスリランカから臣属の証としての仏齒、王女が到来した出来事で記事は終わっているが、新写本の発見に基づいて出版されたミャンマー歴史委員会本 (Toe Hla 2006) には、さらに、ハンターワーディー・バゴーの新王宮の建設、1579年に第2子のノーラタミンソーNawrahta Minsawをチェンマイのミン min（「王」＝領主）としたこと、1576年に王国の東部にタイへの防衛の拠点としてミャワディ Myawaddy・ミョウ（町、砦）を建設したこと、同年に、王国の北西部にカレーKale・ミョウを建設したこと、パテイン（バセイン）の港に毎年四十～五十隻の外国船が訪れ、ナーガパッティナム、スリランカ、マラッカなど様々な国との貿易で栄えていること、などが王の事績として述べられている (Toe Hla 2006: 149-177)。

以上みてきた内容から判断すると、本書は、王の「一代記」であるというより、王の「戦記」であると言っていいように思われる。その序には、本書は、「諸王の王」たるバインナウン大王の

戦争を中心とする偉業を記録するとともに、それは王の勇猛を示すだけでなく、全ての事績は周囲の大臣や将軍など側近の助言を受け入れるという王の聡明さをも示すためでもあると述べられている。事実、それぞれの出来事を述べる各章の最後には、その助言を行った個人の名が記され、それに従った結果、「〇〇の事績は成功裏に終わった」という結びの文が附されている。これは、ウー・トーカウン氏によれば、ジャータカの叙述方法に範をとったものである (Thaw Kaung 2010b: 131)。

この点で、同じ王の事績を述べる「年代記、王統史 (ヤーザウイン)」とこの「戦記」は、その作成の意図に大きな違いが見られると、ウー・トーカウン氏は考えている。すなわち、「戦記」は基本的に王の賛美に終始するのに対して、ウー・カラーの大年代記をはじめとする「年代記」は王の偉大さを述べつつ、仏教の盛者必衰の理に従って、いかに偉大で強力な王であろうとやがて滅び消え去っていくことを示すことを一つの目的としている、という (ibid.)。

(d) *Nyaungyan Mintaya Ayedawbon*

本書は、他のアイエードーボンとは違い、ピタカッ・タマイン *Pitakat-taw thamaing* (Yan 1959) には含まれず、また、テキストそのものにも著者の名前は記されていない。本書のテキストを載せる5巻本(6巻本)は、著者をミインゴンダイン・ミョウザー *Myin-gon-daing Myosa* マハーアトゥラダンミカヤーザ *Maha Atula Dammikayazar* とし、ウー・ペーマウンティン氏は、(e) *Alaung Mintaya Gyi Ayedawbon* の著者であるレッウエーノーヤター *Letwe Nawrahta* (1723-1791) の手になる可能性を指摘して (ペーマウンティン 1992: 226) おり、成書年代をコンバウン朝初期の1770年代とするが、両説ともに明白な根拠は示されていない。

一方、イーイー博士は、両説とも否定し、本書は、ウー・カラーU Kala の『マハーヤーザウインジー (大年代記、大王統史) *Maha Yazawin Gyi*』(1714~1733の間に完成) およびシン・タンコー *Shin Than Kho* (1598-1638) の史語『ミンイエディパ・エージン *Min Ye Dibba Egin*』(1608頃成書) から直接引用もしくは題材を採って書かれた覚え書きのようなもので、著者は不明であるが、その成書年代は、早くとも18世紀前半以降となる、としている (Yi Yi 1969: 52-53)。

著者について諸説ある現時点では、その成書も、第二次タウンゲー朝 (ニャウンヤン朝) (1599-1752) 後期の18世紀前半もしくはコンバウン朝 (1752-1885) 初期の18世紀後半のいずれとも決しがたく、第二次タウンゲー朝の創始者であるニャウンヤン王の事績を語る本書の成書の意図も計りがたい。今後のさらなる写本の探索、およびテキストの分析を俟ちたい。

現テキストの内容は、ニャウンヤン王(在位1599-1606)とその王子アナウツペツルン *Anaukpetlun* (在位1606-1628) が、瓦解したタウンゲー朝の再建に尽力し、上ビルマのインワを拠点として下ビルマ各地を支配下に収め、シリアムに拠るポルトガル人勢力を駆逐し再びビルマを統一していく様子が述べられる。記事は1613年で幕を閉じるが、基本的には統一戦争の次第が述べられている点で、「戦記」というジャンルに属するものと考えていいように思える。ただし、両王の事績に

ついでに記述の分量はほぼ半々であり、タイトルはニャウンヤン王の名前を冠するが、実際は二人の王の「戦記」となっている点で、「一代記」という名称はふさわしくない。これも、また、「第二次タウングー朝の諸王の年代記」もしくは、「王朝年代記の第一章」ととらえるのが妥当であるように思われる。

(e) *Alaung Mintaya Gyi Ayedawbon* (3種のテキスト)

ウー・トーカウン氏によれば、このアイエードーボンには少なくとも三種の異本が存在し、そのうち、二本には著者に関する記載がないため、作者については、研究者の間でも様々な見解が存在するようである(Thaw Kaung 2010a: 23-25; 萩原 1971)。ピタカツ・タマイン *Pitakat-taw thamaing* には、レッウエーノーヤター (1723-1791) がアラウン大正法王 *Alaung Mintaya Gyi* (アラウンパヤー：(在位 1752-1760)) の治世中に作成したアイエードーボンとトゥインディンダイツ・ウン、マハースィードウー、ウー・トゥンニョー (1726-1806) のアイエードーボンの二本がリストアップされている (Yan 1959: 266)。王朝末期に存在したことが確認できその後の所在が不明なこれら二種のアイエードーボンが、その後出版された諸本⁷⁾のどれに相当するのか、その著者が誰なのか、新たに見つかった国立図書館、マンダレー大学図書館所蔵の貝葉写本⁸⁾が、どの本に対応するのか、などをめぐって研究者の意見は分かれている。そのすべてを紹介するのは煩雑になるし、また、筆者の手許にはすべての版本があるわけでもなく、写本も未見であるので、それぞれの説の当否も判断しがたい。著者をめぐる論争を紹介しているウー・トーカウン氏も未発見の写本の渉猟も含めてさらなる比較照合が必要であるとするのみで、結論的なことは述べていないので、ここでは、どのテキストの著者が誰であろうと、少なくともアラウンパヤーと同時代かもしくはその死後しばらくの間に編纂されたことは間違いないことのみを確認しておきたい。また、それぞれのテキストの著者が現時点では確定していない以上、その利用に当たっては、版本、写本を含めて、どのテキストを使用しているのかを明確にすることが必要になる。

Hla Tin 校訂2種本 (*Hla Tin* 1961) ⁹⁾に含まれる2種類のアイエードーボンは、レッウエーノーヤター作とされるテキストがトゥインディンダイツ・ウンの作とされるテキストよりも倍近くの分量となっているが、その記載内容は、アラウンパヤーの出生から死までの様々な戦争について

⁷⁾ ウー・トーカウン氏によれば、アラウンパヤー・アイエードーボンの版本は以下のとおり。Okkalapa Press 本 (1883 年刊)、Hanthawaddy Press 本 (1900 年刊、1943 年刊)、5 巻本 (1923 年刊)、6 巻本 (1967 年刊)、*Hla Tin* 校訂 2 種本 (1961 年刊)。このうち、筆者が所有もしくは実見したのは、*Hla Tin* 校訂 2 種本 (1961 年刊) (*Hla Tin* 1961) および 6 巻本 (1967 年刊ではなく 1970 年刊の第 3 版および 2005 年刊の第 4 版) で、6 巻本に収録されている 2 種のアイエードーボンは、第 3 版と第 4 版では異なっていることに注意する必要がある。

⁸⁾ 国立図書館所蔵の貝葉写本のテキストは、*Hla Tin* 校訂 2 種本 (1961 年刊) の一つとして刊行されている。マンダレー大学図書館所蔵の写本は未刊であるが、イーイー博士によれば、写本にレッウエーノーヤターが著者であると記載されている点も含めて、さらなる調査研究が必要である (Yi Yi 1969: 45)。

⁹⁾ 6 巻本第 4 版 (2005 年刊) は、ほぼ同一のテキストを載せている。

詳述しているという点では同じであり、その詳述の程度が異なっているにすぎない。ただ、アラウンパヤーの出自については、トゥインディンダイツ・ウン本は、パガン朝のナラパティスィー トゥーNarapatisithu(在位 1173-1210)にさかのぼると簡単に述べているのみであるが(Hla Tin 1961: 155)、レッウエーノーヤター本では、ブッダのミャンマー来訪と予言にはじまり、ピュー、パガンと続く王朝の諸王の系譜がアラウンパヤーにつながっていることが詳述される(Hla Tin 1961: 1-13)。

その記事に次いで、モーソーボーMoksobo(シュエボー、別名コンバウン)での出生(1714)の様子、下ビルマのパゴーのモン族を中心とする勢力が第二次タウングー朝の都インワ(アヴァ)を陥落させて王朝を滅ぼし、さらに北に勢力を拡張しようと軍勢を派遣したのに対して、モーソーボーの首長であったアウンゼーヤが、ビルマ族を中心とする諸勢力を糾合してその軍勢を退け、自ら王位に即いてアラウンパヤーと名乗ったこと(1752)、内陸部の足場を固めた後、海岸部への反攻を開始してダゴンを落とし、その地をヤンゴン(敵の殲滅)と改称した(1755)こと、そして、執拗な抵抗を続けていたパゴーをも陥落させ、今日のミャンマーの中央部を統一することに成功したこと(1757)などが述べられ、さらに、勢力の拡大を目指して、東部のシャン地方、西北のマニプールへと遠征し(1758)、翌年には隣国のアユタヤ攻略を目指す、結局退却を余儀なくされ、その途上で死去した(1760)ところで記事は終わる。

ウー・トーカウン氏によれば、先述したマンダレー大学図書館所蔵の写本には、刊本には含まれていない、アラウンパヤーの出生から即位までの四〇年間の事績が詳述されており、その著者自身はこの本を「*Alaung Mintaya Gyi Athtokepatti Ayedawbon Yazawin*」(Athtokepattiは「伝記」と呼んでいる(Thaw Kaung 2010a: 32-33))。c)の*Hanthawaddy Hsinbyumyashin Ayedawbon*と同様に、ミャンマー歴史委員会による校訂本が出版されるようなので、その詳細はいずれ明らかになると思われるが、現行の刊本のテキストを見るだけでも、このアイエードーボンは、アラウンパヤーの「戦記」もしくは「一代記」として間違いないであろう。

(a) *Dhanyawaddy Ayedawbon*

本書の著者、成書年については、奥付に記されているとおりで、研究者の間でも特に異論はない。それによれば、Kawitharabi Thiri-pawara Eggamaha Dhamma-razadi-razagura という称号を持つヤカイン(アラカン)僧正が、ビルマ暦 1149(西暦 1788)年に書いたという(六巻本第4版: 98-99)。それは、コンバウン朝のボードーパヤーBodawpaya王(在位 1782-1819)によるアラカン併合の三年後の年にあたる。

本書は、これまで見てきたアイエードーボンとは異なり、国王の名ではなく、ダニャワディー Dhanyawaddy(アラカンの古称、雅称であり、またアラカン王国の都の名でもある)という地方、国名が冠されている。その内容も、紀元前 825年という伝説上の諸王の時代から始まり、1784年の王国最後の王までの歴史が綴られる。

したがって、このアイェードーボンは、特定の王の「戦記」や「一代記」とは考えにくい。荻原氏も「アラカン地方を支配した諸王朝の年代記」（荻原 1971: 129）としているが、奥付に「ミャウツウーMyauk-U（ムラウウーMrak-U）・ミョウの大国の王統（王朝）のアイェードーボン」をアラカンのヤーザウイン（王統譜、年代記）などから抜粋要約して編纂したとあり（六巻本第4版: 98-99）、ムラウウー王国（1433-1785）時代最盛期のミンビン Min Bin（別名 Min Pa-Gy）（在位 1531-1553）、ミンパラウン Min Phalaung（在位 1571-1593）、ミンヤーザジー Min Rajagyi（在位 1593-1612）についての記述が詳しいので、より正確には、「ムラウウー王国の諸王の年代記」と考えるほうがよいように思われる。

(g) *Hsinbyushin Ayedawbon*

本アイェードーボンは、未だ刊行されておらず写本の所蔵状況についても不明であり¹⁰、筆者も未見であるので、その内容などについては、このアイェードーボンの著者とされるレッウエーノーヤター（1723-1791）の生誕 250 周年記念研究論集に収められた諸論文など（Kyauk Taing 1974; Htun Yi 1974; Thaw Kaung 2010a）によって、見ていくこととしたい。

書名に冠されるシンビューシン Hsinbyushin は、パインナウン王のところでも述べたように、「白象 Hsinbyu の主 shin=国王」を意味し、ここでは、コンバウン朝のボードーパヤー Bodawpaya 王（在位 1782-1819）のことを指す。

写本の表には、アイェードーボンではなく、Min Khan-daw Sardan（王宮儀礼に関する記録）とあるが、本文の冒頭の一節に著者自身がこの書のことを Hsinbyushin Mintaya Gyi Ayedawbon Thamaing（シンビューシン大正法王のアイェードーボン・タマイン）と呼んでいることから、一般的には、Hsinbyushin Ayedawbon と称するようになったようである（Kyauk Taing 1974: 137）。

本書は、1819 年まで続く王の治世の三十八年間のうち、最初の四、五年間の事績のみしか扱っておらず、また、現存の写本は、1 葉 12 行、6 インガー-anga（1 インガー=12 葉）と 2 葉からなる 74 葉の貝葉写本である（Htun Yi 1974: 280）ので、本来の書の後半が欠落している可能性がある。ただ、著者レッウエーノーヤター自身も 1791 年に死去しているので、誰もその後を継続していないとすれば、欠落もそんなに多くないかもしれない。また、本書の成書年代も、写本に見える最後の記事が 1786 年のできごとであるので、著者の死亡年 1791 年までのいずれかの時期ということになる。

本書に記述されている事績は、王が、甥の篡奪王マウンマウンを追放し王位に即いたこと、新都アマラープラを建設し壮大な即位式を行ったこと、皇太子率いる軍がアラカン王国を征服し、マハームニ大仏を新都まで運ばせたこと（1785）など、勢力を拡大していく様子を詳細に述べる

¹⁰ ウー・トーカウン氏によれば、ウー・マウンマウンティン氏所蔵の貝葉写本から 1985 年に作成したタイプ印刷本が、大学中央図書館に所蔵されている（UCLA Accession no. 327461）が、これも筆者は未見（Thaw Kaung 2010a: 38）。

ほか、王都の物価や宮廷内の豪華な様子を詳述している。また、仏教を弘布するためさまざまな事業を行い、仏教発祥のインドにも使節を派遣したことなども述べられている (Htum Yi 1974: 281-284) ¹¹。

まさしく王の「一代記」にふさわしい内容であり、同時代史料として貴重なものと言っていいだろう。しかし、著者が早くに亡くなったこともあり、後半の欠落がどれくらいかも不明であるが、扱われる時代が王の一生ではなく、なぜ治世の初期のみなのかは考える必要があるだろうし、これまで見てきた王の名を冠するアイェードーボンとは性格が異なる可能性も考慮に入れておくべきであろう。

(f) *Majjhimadesa Ayedawbon*

本書は大英図書館旧インド省コレクション所蔵の貝葉写本 (Burmese manuscript no.3503) およびそれからのタイプ起こし本、ヤンゴンの大学中央図書館所蔵の貝葉写本 (pe no. 4571) などが一部の研究者の間で知られているのみで、長い間アクセスが容易でなかったが、最近これらの写本やタイプ印刷本を比較照合した校勘本が出版されたので、ようやくその全貌が明らかになりつつある (Hla Tun Phyu 1998)。

著者は、アラカンのドゥワーヤーワディー *Dwarawaddy* (現在のサンドウエー *Sandway; Than Dwe*) のミョウウン *myowun* (知事) ネーミョーゼヤチャーティン *Nay Myo Zeya Kyaw Htin* で、父は旧アラカン王国の高官、母は第二次タウンゲー朝の王家の血筋を引く人物で、ボードーパヤー王によるアラカン征服後は、コンバウン朝に仕えアラカン地方の支配の一端を担った人物である (Hla Tun Phyu 1998: 1-9)。その成書年は、奥付の後書きに 1823 年 11 月 17 日 (ビルマ暦 1185 ダザウンモン月白分 5 日) と記されている (Hla Tun Phyu 1998: hpe-hpaw)。

本書の内容は、大きく分けて三部に分かれる。第一部では、1794 年から 1795 年にかけてのビルマの支配に対するアラカン族の反乱とその鎮圧に関する出来事が述べられている。第二部は、1798 年から 1811 年まで続いた、イギリスのベンガル植民地当局をも巻き込む形でアラカンのビルマ支配に対抗したチンビャン *Nga Chin Byan* (イギリスの史料では *Kingbering*) の反乱とその鎮圧についての記事、第三部は、ボードーパヤーがインドのベナレスなどに古典書を求めて派遣した使節 (1812-1815)、インド側から到着したその答礼使節 (1814-1815) などについての記録 (途中のカルカッタではイギリスの植民地当局とのチンビャン問題をめぐる交渉があったことがイギリス側の記録からわかっている) であり (Hla Tun Phyu 1998)、1812 年の使節を率いたのは著者のゼーヤチャーティン自身であった¹²。

問題は、本書のタイトルである。ミッツィマデータ・アイェードーボンのミッツィマデータと

¹¹ ボードーパヤー王の治世については、渡辺 1987 を参照。

¹² アラカンをめぐるコンバウン朝とイギリスの交渉については、*Ramachandra* 1977; 同 1979; 渡辺 2001; 同 2003 を参照。

は、パーリ語の「Majjhima=中、desa=地方、国」で「中つ国」を意味し、当時のビルマではインドもしくはガンジス中流域のインドの雅称として使用されていた。従って、この書も地名を冠するアイエードーボンである。研究者の間で議論となっているのは、この書がはたして「アイエードーボン」であるかどうかである。

二種の写本や多くのタイプ本、フラトゥンビュー氏の校勘本のすべては「アイエードーボン」となっているが、本書の後書き部分では「アイエードーボン」という言葉を使わず、「ミツズイマデータ国についてのすべてを記録 sadan にとどめた」(Hla Tun Phyu 1998: hpaw) とあることから、イーイー博士は、これをアイエードーボンと呼ぶことに否定的である(Yi Yi 1969: 58-60)。これに対して、校勘本の編者であるフラトゥンビュー氏は、本書の内容は基本的にアラカンにおけるボードーパヤーの権力確立に関わる出来事が中心であり、また、ボードーパヤー自身も自らの詔勅の中で、アラカンでの出来事(反乱)を「アイエードー」と呼んでいることから、本書は「アイエードーボン」と呼ぶにふさわしい記録であると述べている(Hla Tun Phyu 1998: hkay-ke)。ともに、現存する他のアイエードーボンを念頭に置いて、それらとの相違、共通点を根拠に全く逆の見解を導き出しているため、両者の見解の相違はなかなか決着がつきそうにない。

しかし、これらの見解とは別の側面から本アイエードーボンを見てみると、その性格についてもう一つ別の結論が導き出せる。すなわち、本書の著者と本書で語られる諸々の出来事との関係である。フラトゥンビュー氏のまとめたゼーヤチャーティンの伝記(Hla Tun Phyu 1998: 1-9)を見てみると、第一部の1794-1795年のアラカン族の反乱ではその鎮圧に活躍し、イギリス領に逃亡した反乱指導者の引き渡しの交渉に成功した功績により、アラカンの税関長 Dhanyawaddy Ahkwan Wun に昇任している。次いで第二部のチンビャンの反乱でもその鎮圧に大きな功を上げ、亡命反乱者の引き渡し交渉のための使節団を率い、その後ビルマに派遣されたイギリス使節団との交渉の実務も担当した。第三部のベナレスへの使節(1812-1815)では、団長をつとめ、インド側からの答礼使節(1814-1815)を連れ帰った功績によりバゴーの知事(Hanthawaddy Myowun)に昇任し、その後起こったアラカン南部の反乱を鎮圧するために、ネーミョーNay Myoの銜号を与えられドゥワーヤーワディー(現在のサンドウエー)のミョウウンとなり、アラカン山脈越えのルートの整備にあたっている。

以上のことから明らかのように、本書は、アラカンに関するボードーパヤー王の事績というよりは、王に仕えたゼーヤチャーティン自身が自らの成し遂げた職務についてまとめたものと言ってよい内容となっている。その書が完成した1823年は、すでにボードーパヤー王(在位1782-1819)は亡くなっており、孫のバジードーBagyidaw(在位1819-1837)が即位してイギリスとの間の緊張が高まり、第一次英緬戦争1824-1826につながる両軍の衝突が起こっている時にあたる。この書が編まれた意図なり目的は明確に記されていないわけではないが、次代の王に、自らの功績を伝える、もしくは、両国の緊張関係が高まっていく背景を説明するといったねらいがあった可能性は否定できない。

したがって、この書は他の現存するアイェードーボンとは違って、特定の王の「一代記」や「戦記」でもないし、特定の王国や王朝の王たちの「年代記」でもない。その意味では、イーイー博士の主張することが正しいと言えるが、「記録」されているのは、「アイェードー（王から〔命ぜられた〕職務）」であり、結果として王の権威、権力の伸張に関わることであるので、フラトゥンビュー氏のいうようにアイェードーボンと言っても過ちではないように思える。少なくとも、現時点で見つかっている中では、他には類例のないタイプのアイェードーボン、もしくはアイェードーボンの「変種」と言っていだろう。

結びにかえて

これまで、現存する7種9本のアイェードーボンについてその内容を簡単に紹介し、それらが、必ずしも一つのジャンルの史書にまとめられるものでもないことを確認してきた。

第一次タウングー朝のバインナウン（在位 1551-1581）の治世中に編まれたラーザディリッ・アイェードーボンは、ラーザディリッ王の「戦記」や「一代記」というよりは、王を中心とするハンターワーディー・モン王国の「諸王の年代記」であった。同じく第一次タウングー朝時代の16世紀末に成ったと最近の研究で明らかになったハンターワーディー・シンビューミャーシン・アイェードーボンは、バインナウン王の「戦記」であり、従来考えられてきたアイェードーボンの典型とっていい史書である。

第二次タウングー朝末期もしくはコンバウン朝初期の作と考えられるニャウンヤンミンタヤー・アイェードーボンは、第二次タウングー朝草創期の二人の王の「戦記」であり、コンバウン朝初期の18世紀後半の作であるアラウンミンタヤージー・アイェードーボンは、アラウンパヤー王の「戦記」もしくは「一代記」である。1780年代末に書かれたと考えられるシンビューシン・アイェードーボンは、内容としては、ボードーパヤー王の「一代記」であるが、治世の最初の四～五年間のみを扱っているので、違う性格を持つ史書である可能性もある。

これらに対して、地名を冠する二つのアイェードーボンは、一般に考えられてきたアイェードーボンとは少し性格が異なる。ボードーパヤー王の1788年に成ったダニャワディー・アイェードーボンは、征服後のアラカン、特に「ムラウー王国の諸王の年代記」で、一見するとラーザディリッ・アイェードーボンと同じような性格を持つ史書のように見える。しかし実際は、征服されたアラカン族の不満を和らげ、その王国の後継者としての地位を強調するために書かれたのではなく、征服された王国の歴史を簡潔にまとめてボードーパヤー王に報告、紹介するためであった可能性が高い。

そのボードーパヤー王の死後すぐの1823年に完成したミツズイマデータ・アイェードーボンは、アラカンに関するボードーパヤー王の事績をまとめた「戦記」「一代記」ではなく、一臣下の功績をまとめた「アイェードーボン」、もしくは、ビルマとイギリスとの間の緊張・対立関係を生みだした背景を説明した「アイェードーボン」であった。

成書年代も異なり、作者の属する民族や王朝、王国も異なっているので、修史の手法や作成の意図、目的が違うのは当然であるかもしれないが、本論文で見えてきたアイェドーボンには、必ずしもすべてが、戦争の記述を中心として国王の事績を語るものではなかったことを確認しておきたい。

しかし、同時に、これらのアイェドーボンは、一人の王、もしくは、複数の王、あるいは、特定の王国の諸王の偉大な事業について述べる上で、「戦争」についての語りを中心に占めていると言う点では共通することも確認しておきたい。この点において、「戦争」についても語るが、「仏教」に関わる様々な事績を同時に、もしくは中心にして語る、ヤーザウインやタマインといった他の史書とは、あきらかに別の系統の史書であると言っていい。

「戦争」の語りを中心とする「英雄の物語」的史書の伝統がビルマ独自のものであるのか、他の東南アジアやインドの史書との違いがあるのかについては、触れることはできなかった。また、アイェドーボンだけでなくヤーザウインも、現存するものは、16世紀以降の作のもので、特に18-19世紀のコンパウン朝の時期に多く書かれていることをどう考えるのかについても考察することはできなかった。今度の課題としたい。

参考文献

史料

- -, 1970 (3rd. ed.), *Ayedawbon Chauk Saung Dwe thomahot Myanmar Min Mya Ayedawbon*, Yangon: Nanmyin Sarpay (6巻本と略称) .
- -, 2005 (4th. ed.), *Myanmar Min Mya Ayedawbon (Ayedawbon Chauk Saung Dwe)*, Yangon: Yarpyi Sarok Taik (6巻本と略称) .
- Saya Bi, Saya Thein & Saya Ko Ba Gyaw (eds.), 1923, *Ayedawbon Nga Saung Dwe*, Yangon: Thudhamawadi. (5巻本と略称) (未見)
- U Hla Tin (Hla Thamain) (ed.), 1961, *Alaungpaya Ayedawpon, Hnit Saung Dwe [Two versions]*, Yangon: Ministry of Union Culture.
- U Hla Tun Phyu (ed.), 1998, *Majjhimadesa Ayedawbon Kyan*, Yangon: Moe Kyi Sarpay.
- Nai Pan Hla (ed.), 1958, *Rajadirit Ayedawbon (Mon version)*, Yangon: Burma Research Society.
- Nai Pan Hla (new tr. from Mon text), 1977, *Rajadirit Ayedawbon Kyan*, Yangon: Min Hlaing Htaw Sarpay Taik.
- Dr. Toe Hla (ed.), 2006, *Hanthawaddy Shinbyu-shin Ayedawbon Hmawgun U-dan*, Yangon: Myanmar Historical Commission.
- U Yan (Maing Khaing Myosa) (U Khin Soe et al (eds.)), 1959, *Pitakat-taw thamaing*, Yangon: Hanthawaddy Press.

研究

- 青山亨 1991 「ナガラクルタガマ」土屋健治・加藤剛・深見純生編『インドネシアの事典』同朋舎: 302-203.
- Aye Kyaw, 1985, "Burmese Sources for Lan Na Thai History," *Journal of the Siam Society* 73-1&2: 235-249.
- Cowan, C.D. & O.W. Wolters (eds.), 1976, *Southeast Asian History and Historiography: Essays presented to D.G.E. Hall*, Ithaca: Cornell University Press.
- 深見純生 2011 「マタラムの建国年次について:『ババッド・タナ・ジャウイ』という文学と歴史のはざままで」『国際文化論集』44: 29-48.
- 深見純生 2012 「[翻訳] ババッド・タナ・ジャウイ (1): 第1部ババッド・パジャジャラン」『国際文化論集』45: 145-164.
- Hall, D. G. E. (ed.), 1961, *Historians of South East Asia*, London: Oxford University Press.
- 早瀬晋三・桃木至朗編 2003 『岩波講座東南アジア史 別巻 東南アジア史研究案内』岩波書店
- 弘末雅士・渡辺佳成 2008 「歴史記述」桃木至朗・小川英文・クリスチャン＝ダニエルス・深見純生・福岡まどか・見市建・柳沢雅之・吉村真子・渡辺佳成編 『新版 東南アジアを知る事典』平凡社: 486-487.
- Dr. Hla Pe, 1985, "Observations on Some of the Indigenous Sources for Burmese History down to 1886," in Dr. Hla Pe, *Burma: Literature, Historiography, Scholarship, Language, Life and Buddhism*, Singapore: ISEAS.
- U Htun Yi (Writing under the pen-name Shayhaung Sarpay Thutaythi Ta Oo), 1974, "Letwe Nawrahta Bawahnei Sarpay (レウエーノーヤターの一生と文学)," in *Min Letwe Nawrahta (1085-1335)*, Yangon: Myanmar Nainggan SarpayPyant Pwa-ye Athin: 179-300.
- 石井米雄 1965 「タイ語文献について(4): 諸地方の Phongsawadan」『東南アジア研究』2-4: 38-51.
- 石井米雄 1984 「「ボンサーワダーン」(王朝年代記)についての一考察」『東南アジア研究』22-1: 22-33.
- 石井米雄・渡辺佳成 2008 「ヤーザウイン」桃木至朗・小川英文・クリスチャン＝ダニエルス・深見純生・福岡まどか・見市建・柳沢雅之・吉村真子・渡辺佳成編 『新版 東南アジアを知る事典』平凡社: 465-466.
- Judson, Adoniram, 1921 (2nd ed.), *The Judson Burmese-English Dictionary*, Yangon: American Baptist Mission Press.
- 北川香子 2003 「カンボジア年代記」早瀬晋三・桃木至朗編 『岩波講座東南アジア史 別巻 東南アジア史研究案内』岩波書店: 129-132.
- Maung Kyauk Taing, 1974, "Thukhamain U Nay i Sarpay Gita Thutaythana (Thukhamain U Nay = レウエーノーヤターの文学・音楽についての研究)," in *Min Letwe Nawrahta (1085-1335)*, Yangon:

Myanmar Nainggan SarpayPyant Pwa-ye Athin: 40-178.

Myanmar Language Commission, 1993 (2nd ed.), *Myanmar English Dictionary*, Yangon: Ministry of Education.

野村亨訳注 2001 『パサイ王国物語 Hikayat Raja Pasai : 最古のマレー歴史文学』 平凡社、東洋文庫

荻原弘明 1971 「アエドーボウン六篇」あるいは「ビルマ諸王アエドーボウン」『鹿児島大学史録』4: 125-136.

大野徹 1987 「ビルマ語の年代記とは何か」『鹿児島大学 史録』19: 5-21.

大野徹 2000 『ビルマ(ミャンマー)語辞典』 大学書林

奥平龍二 1999 「ビルマのタマイン(「史書」)について」『総合文化研究』3: 60-67.

U Pe Murtg Tin, 1977 (1937 3d.ed), *Myanmar Sarpay Thamaing*, Yangon: Sape U Sarpay (ウー・ペーマウンティン著、大野徹監訳 1992 『ビルマ文学史』 井村文化事業社).

Ramachandra, G.P., 1977, "Anglo-Burmese Relations, 1795-1826." Ph.D. diss., University of Hull.

Ramachandra, G.P., 1979, "The Canning Mission to Burma of 1809/10," *JSEAS* 10-1: 119-138.

Reid, Anthony & David Marr (eds.), 1979, *Perceptions of the Past in Southeast Asia*, Singapore: Heinemann Educational Books (Asia).

柴田紀男 1991 「ババッド」「ヒカヤット」土屋健治・加藤剛・深見純生編『インドネシアの事典』同朋舎: 340, 365.

U Tet Htoot, 1961, "The Nature of the Burmese Chronicles," in Hall, D. G. E. (ed.), *Historians of South East Asia*, London: Oxford University Press: 50-62.

U Thaw Kaung, 2010a, "Ayedawbon Kyan, an Important Myanmar Literary Genre Recording Historical Events," in U Thaw Kaung, *Aspects of Myanmar History and Culture*, Yangon: Gant-gaw-Myaing Sarpay: 13-42 (U Thaw Kaung, 2000, "Ayedawbon Kyan, an Important Myanmar Literary Genre Recording Historical Events," *Journal of the Siam Society* 88-1&2: 21-32).

U Thaw Kaung, 2010b, "Bayinnaung in the *Hanthawaddy Hshinbyu-Shin Ayedawbon Chronicle*," in U Thaw Kaung, *Aspects of Myanmar History and Culture*, Yangon: Gant-gaw-Myaing Sarpay: 127-143.

渡辺佳成 1987 「ボードーパヤー王の対外政策について—ビルマ・コンバウン朝の王権をめぐる一考察」『東洋史研究』46-3: 129-63.

渡辺佳成 1996 「コンバウン朝前期における支配領域の認識—国家意識の探求」吉川利治編『東南アジア史に見る国家意識』京都大学: 40-66.

渡辺佳成 2001 「コンバウン朝ビルマと「近代」世界」齋藤照子編『岩波講座東南アジア史 5 東南アジア世界の再編』岩波書店: 129-160.

渡辺佳成 2003 「18-19世紀イギリスにとってのビルマ」『文化共生学研究』1: 153-168.

Dr. Ma Yi Yi, 1965, "Burmese Sources for the History of the Konbaung Period 1752-1885," *Journal of*

Southeast Asian History 6-1: 48-66.

Dr. Yi Yi, 1969, "Ayedawbon kyanmya pyat-thana (アイエードーボンに関する諸問題)," in *Kantha Seinlei Sardanmya*, Yangon: Minhla Sarpay: 30-62.